

Carlyle: CROMWELL'S LETTERS AND SPEECHES IV

—最後の演説と書簡—Walkomg worthy of the Lord—

松藤 亨

倉敷芸術科学大学非常勤講師

(2003年9月30日 受理)

I. 序 (Introductibion)

彼が50才の精神の絶頂期に書いた Cromwell's Letters and Speeches 『クロムエル伝』は、Carlyleがその至醇の精神と精力を注ぎ込んで書いた全四巻に亘る大作で、彼が真誠に崇拜せしクロムエルとは如何なる人物なるかを証している。『クロムエル伝』執筆の5年前の作『英雄崇拜論』で彼は英雄の一人として Cromwell を論じて真実義勇の士、信仰の偉人としているが、その後資料の収集を重ねて更にこの所信を事実に証明しようとして、1841年より英国内の Cromwell の古跡を訪ね、時には足を国外にも延ばして Cromwell の書簡と演説筆記を集め、それを訂正整理し、生命秩序を与え、説明補足して一貫の精神を全編に与え、4年の苦心の末、生命澁刺として躍動せる『クロムエル伝』を世に出したのである。

『クロムエル伝』は4巻あり、書簡225通、演説16文が収められている。ここではその最終巻Vol.IVに含まれている Protector Cromwell の最後の演説2つと、最後の書簡数通を吟味鑑賞し、彼の深き信仰帰依、英国民を守りその安寧を想う心情と篤き祈り、そして議員達への警告奨励、新教徒への同情を説明し、その謙遜、心霊の自由、人間性を忘れない愛情ある強い信仰と実行力を共に味わいたいと思う。

II. 最後の演説

1. Speech17 (最後より二番目)

当時の英国議会の下院は甚だしく Cromwell の期待に反した。1685年1月25日、上下両院議員を集めて Cromwell は過去を顧み、将来を察し、海外を望み、国内を看て、誠に高貴にして信仰深く、実状を訴え覚醒を促す非常に長い(20頁にわたる)演説をした。

1) My apprehensions of the State of the affairs of these Nations; together with the proposal of such remedy as may occur, to the dangers now imminent upon you.— (Oliver Cromwell's Letters and Speeches IV p.152) 以下同書の頁数を示す。

と国情について彼の懸念を開陳し、かつ目下の危険に対する救済法を申し出ている。誠に内憂外患の苦難多き国情であった。またプロテスタントが海外で踏み躪られている実情を悲しみ、ローマ法王への敵対の感情をあらわにしている。また英国人であることを誇りにし、国の真の

利益を求むべきことを訴えている。然るに国内では各宗派別れて相闘^{せめ}ぎ、党争に日もまた足らざるの有様を呈していると嘆き、神の助けあるによりてのみ、無政府状態に陥らず今こうやっておられると神に感謝を捧げ、議員諸君をして悟るところあらしめ、一致協力して事に当るよう神の導きを祈り求めているのは次の引用文でもわかる。

2) — I pray God affects your hearts with a due sense of it! and give you one heart and mind to carry on this work for which we are met together. (ibid. P.169)

そして詩篇85を再び取り上げ、“エホバその民、その聖徒に平和を語り給いしなり。されば彼らは愚かなる行為に再び帰ることなかるべし”を引用し、もし英国民にしてこの愚かなる行為に再び帰るような事があれば、万事休すといわざるをえずと警告し、「諸君が私をこの守護官の地位に上せ、その職に就かせたのであれば、私は只管国利に忠実に政府に忠実に務めることを神の前に、天使万人の前に誓い、万人が政治上、宗教上の正当なる権利を保護されるようお願い、神の祝福を祈りつつ、この長き詳細にわたり、熱涙下る演説を終わっている。その最後の文は下記の如くである。

3) “And so having declared my heart and mind to you in this, I have nothing more to say, but to pray, God Almighty bless you! —” (ibid. P.172 Speech 17の終わり)

2. Speech 18 (the last Speech)

Cromwell がなしたこの Speech 17 の熱涙下る真摯悲痛の訴え警告にも拘わらず第二会議は、期待に反し、喧騒空論続き、内にも騒乱が孕んでいた。時あたかも1658年2月20日、議事が中断されて、Cromwell は並々ならぬ真剣と決断を示す厳格たる容貌を以て議会解散の宣告をなしたのがこの Speech 18 で彼の最後の Speech である。先ず神へ議会の祝福を祈っていた事を述べ、自分は人々に頼まれ求められて守護官の最高職位についた事、これはたしかに重荷であった事、できれば森の脇にて羊を飼った方がましであった事など率直に告白している。

Cromwell はもう一つの議会（上院）が設立された事を報告し、この新議会の議員として自分が依頼した人々は侯伯、党派を求めず、キリスト信仰と英国の福祉をのみ求め、下院に加えられる新勢力であることを弁明しつつも、両院の者達が今や分離をひきおこし、紛争をなし、騒乱をおこして、中には陰謀を企て、軍隊をさえ唆^{そそのめ}している現状を訴え、この有様では議会は神の意に反しているといわざるをえず、その真偽は神の裁^{さば}きに任さざるをえずとの決断を示したものである。終わりの部分を少し引用する。

4) “ I did tell you, at a Conference, concerning it, that I would not undertake it, unless there might be some other Persons to interpose between me and the House of Commons, who then had the power, and prevent tumultuary and popular spirits: and it was granted I should

name another House. I named it of men who shall meet you whosoever you go, and shake hands with you; and tell you it is not Titles, nor Lords, nor Parties that they value, but a Christian and an English Interest! Men of your own rank and quality, who will not only be a balance unto you, but a new force added to you, while you love England and Religion.---” (ibid. P.176)

上に述べた如く、Cromwell はもう一つの議会、上院を設立し、その新議員達は、皆様とどこでも握手して協力し、肩書き、侯伯、党派に重きをおかず、ただキリスト信仰と英国の利益のみを求める下院への新しき勢力であることを願っていたが…と弁明し、

5) “ --- And what is like to come upon this, the Enemy being ready to invade us, but even present blood and confusion? — [*The next and final Sentence is partly on fire*] — And if this be so, I do assign "it" to this cause: Your not assenting to what you did invite me to by your Petition and Advice, as that which might prove the Settlement of the Nation. And if this be the end of your sitting, and this be your carriage- [*Sentence now all beautifully blazing*], I think it high time that an end be put to your sitting. And I DO DISSOLVE THIS PARLIAMENT! And let God be judge between you and me.” (ibid. P.176)

神こそわが証人なりとの信仰に立ち、これら反乱、陰謀は神の御旨にそわぬこと^{わきま}を弁えず、議員の中にもそれに加担する者がいる限り、敵の侵入ありせばこの国が血雨混乱の修羅場と化することになり。最高責任者として断乎これを未然に防ぎ、国を護るべき義務あるを訴え、又議員自ら定めた新しき制度を認定せず、今期の状況に照らしてかくの如き怠慢にふけているようであれば、議会の信ずる能わず、神の裁きに委ねざるを得ず。私はここに議会の解散を宣告するとの決断を示し、只々神が諸君と私との間を裁き給わん事を祈ってその最後の Speech を閉じている。

Ⅲ. PuritanismとDestinies

Cromwell は英国清教主義のため欠くべからざる指導者であった。Carlyle は Puritanism に深い理解同情をよせつつもそれは完全ではないと述べている。広大な宇宙は Puritanism を以ては尽きないものがあり、それはその一部分たるのみであるといっている。

6) “Puritanism was not the complete Theory of this immense Universe; no, only a part thereof!”

Oliver Cromwell が為したよりも更に偉大な事が起こるべき運命を Carlyle は考えていた。

7) “We will not quarrel with the Destinies; we will work as we can towards fulfillment of them.”

「我々は運命とは争わない。ただこれが成就するのを願って全力を以て進むのみ」と述べて

いる。ここに運命を最高評価するCarlyleの人生観の一部が垣間見られる。私はこの運命は神の我々の思いを越える摂理の中にあると考えたいのである。

IV. 最後の書簡

1. Letter 222

Letter 225 が最後の書簡であるが、それより少し前の Letter 222 は1657年 8月31日付の Cromwell が深く信頼したLockhart駐佛大使への書簡で、今こそ英佛協力してオランダに進駐しているスペイン軍を包圍攻撃すべきチャンスなることを訴え、佛国の協力を得るよう努力されたいと指示し、この提案が受け入れられなければ佛国に賠償を求める強い決意を表している文書である。その一部を引用する。

8) — And therefore if this will not be listened unto, I desire that things may be considered of to give us satisfaction for the great expense we have been at with our Naval Forces and otherwise.— (ibid. P.132)

2. Letter 223

同じ日付、名宛で Letter 222 を補ったものである。幸いにもこの文書は功を奏して、佛国の宰相は Cromwell の提案に従った。それ故 “The Cardinal is more afraid of Oliver than of the Devil” と、佛国の宰相は悪魔よりCromwellをより恐れるという噂が広がったほどである。最後の辺を引用する。

9) — *That all things may be done in order to the giving us satisfaction “for our expense incurred,” and to the drawing-off our Men.*

And truly, Sir, I desire you to take boldness and freedom to yourself in your dealing with the French on these accounts. Your loving friend, OLIVER P.* (ibid. P.133)

3. Letter 224

最後より一つ前の書簡で1657年10月 2日付で、Whitehall よりロンドン船上の General Montague に宛てた書簡で、Christian Denokson に託して渡したものである。特に木工品に優れた芸術家である Denokson を導き Great Fort や Wooden Fort の砦を点検して、更に強固にするための意見を聞きたい、どういう材木が良いか、又、砦の長官の連隊長にも手紙を書いたことを伝えている。

10) *Sir, — This Bearer, Christian Denokson, I have sent to you, — being a very good artist, especially in wooden works, — to view the Great Fort and the Wooden Fort, in order to the*

farther strengthening of them.

I hope he is very able to make the Wooden Fort as strong as it is capable to be made; which I judge very desirable to be done with all speed. I desire you will direct him in this view; and afterwards speak with him about it, that upon his return I may have a very particular account about what is fit to be done, and what Timber will be necessary to be provided. I have written also to Colonel Clerke, the Governor of the Fort, about it. I pray, when he has finished his view, that you will hasten him back. I rest, your very affectionate friend,

OLIVER P. (ibid. P.134~5)

4. Letter 225 (the last Letter)

これが公のものでは Cromwell の最後の書簡である。アルプス山中の新教徒が再び迫害を受けているので、守護官 Cromwell は国内多事多忙にも拘わらず、これら新教徒への同情と保護を求める書簡を駐佛大使で大将でもある Lockhart に口述で認めさせて送ったものである。1658年2月26日付のもので彼の弱き者への同情と愛を示すものである。この大変長い書簡の最後の辺りを引用する。

11) *…The King of France would be pleased to make an Exchange with the Duke of Savoy for those Valleys; resigning over to him some other part of his Dominions in lieu thereof, — as, in the reign of Henry the Fourth, the Marquisate of Saluces was exchanged with the Duke for La Bresse.¹ Which certainly could not but be of great advantage to his Majesty, as well for the safety of Pignerol, as for the opening of a Passage for his Forces into Italy, — which “Passage,” if under the dominion, and in the hands of so powerful a Prince, joined with the natural strength of these places by reason of their situation, must needs be rendered impregnable.*

By what we have already said, you see our intentions; and therefore we leave all other particulars to your special care and conduct; and rest, “your friend,”

OLIVER P. (ibid. P.193~4)

Cromwell 自身が弱ってきて、もう任さざるを得ざる心境が窺える。この書簡のお陰で the poor people of the Valleys への迫害も止んだのであった。彼はきめ細かな手紙の書き主であった。スコットランド出征中妻に3度も愛情こめた書簡を送って戦勝も神の恩恵と、只管感謝している。敢勇義直の中にも慈愛の心を失わなかった Cromwell の真実の姿が偲ばれる。

V. Closing Remarks

これら書簡、演説を通して感じられる事は、Cromwell の力強い生きた信仰が随所に滲み出し

ていて、聖句、詩篇を適所に引用し、神の摂理を具体的に示し、軍人政治家でありながらも心霊の自由、宗派の自由を積極的に認め、また平和を心より希求し、福音の自由と母国の安寧に献身する姿である。また弱き困った人々への同情救済の努力である。

最高責任者として断乎たる処置をとらざるを得ず、怠れる議員を叱咤激励しつつも、人間らしさ、愛情を忘るる事なく、自分の弱さ罪深さも告白し、神の裁きを第一にし、只々神にゆるされ生かされ召し出されて初めて守護官の重責を負いつつある信条を吐露しているが、その謙遜、心霊の自由、人間性を忘れない愛情ある強い信仰と実行力は、聖霊行伝の人たるを思わせるものがある。“Endeavour in all things to walk worthy of the Load.”「すべてにおいて主にふさわしく歩ま^{あゆ}んと努める」キリスト者の生き方を持ち続け、絶えず新鮮なる驚異の念^{うやうや}もて恭しく神の聖業を称え、その祝福に感謝するクロムエルは17世紀を往くもう一人の使徒行伝の行者であるが如き感慨が与えられ、またこれら演説や書簡をよく収集編集して、かくも生けるが如く後世に書き残したカーライルの努力と Genius にも、改めて深い敬意を表さずにはおれない。

Cromwell は臨終の病床でその苦しき息の下 “Truly Got is good; indeed He is good, He will not —” と祈り、息が止まり、絶句したが、これは “He will not leave me.” 神我を離れ給うまじといわんとしたと察せられ、Cromwell は只管主を信じ頼り、全く主に在りて永遠の眠りについたのも感銘深く、多く数えられることであり、感謝を以てこの小論を書き終える者である。次の Cromwell の Speech V の最後の祈りを共に祈っていききたい。

“To pray Got that He may bless you with His presence; that He who hath your hearts and mine would show His presence in the midst of us.”



CROMWELL (1599—1658)



Carlyle (1795—1881)

BIBLIOGRAPHIE

- ・ Thomas Carlyle: Oliver Cromwell's Letters and Speeches Vol. II. III. IV., AMS Press, New York, Reprinted in 1974 from edition of 1897, London. —Main Text—
- ・ 畔上賢造：『クロムエル伝』 警醒社書店，東京，1927.
- ・ 石田憲次：『カーライル研究』 弘文堂，京都，1923.
- ・ イアン・キャンベル著，多田貞三訳『トマス・カーライル』 成美堂，東京，1981.
- ・ Encyclopedia International (Grolies, New York,1970).
- ・ Encyclopedia Americana (American Corporation, New York, 1967, first published in 1829).
- ・ Louis Cazamian: CARLYLE,1932, New York, the Macmillan Company.
- ・ 松藤亨：カーライルその洞察悟道の文学，あぼろん社，京都，1991.

Carlyle: CROMWELL'S LETTERS AND SPEECHES IV — Last Speeches & Letters—walking worthy of the Lord —

Toru MATSUFUJI

Kurashiki University of Science and the Arts,

2640 Nishinoura, Tsurajima-cho, Kurashiki-shi, Okayama 712-8505, Japan

(Received September 30, 2003)

Carlyle wrote four volumes of *Cromwell's Letters and Speeches* at the age of 50, the peak of his life, and edited and introduced 225 letters and 18 public speeches. In this paper I will examine his last speeches and letters. The last speeches were made at the Diet as policy speeches, address speeches, declarations of dissolution of the Parliament, admonition and encouragement to lazy members, diplomatic policy, exhortation of spiritual and religious liberty and so on. The speeches were very long, lasting a few hours each, but they were full of sincere and heart-moving touches and exuded his deep faith and absolute trust in God and His Providence, so that I feel as if I were hearing great and lofty sermons or divine lectures in place of policy speeches. His profound belief and whole-hearted thanks for the grace of God flowed from the speeches.

In his last letters, I feel that he never failed to hear the small heavenly voice, and paid attention to the simple wishes of the common and troubled people.

As the highest bearer of responsibility, he could not but take resolute actions and the unreserved admonition of lazy Parliament members, but at the same time, he himself confessed his weakness and sinfulness and revealed his wish to go back to his private rural life and till the soil quietly, unless he was called out by God to this utmost duty as Protector.

He himself confessed that he was allowed to live only through the forgiveness of sin and the grace of God. He really believed, lived and practiced as faithfully and devotedly as the Apostles in the Acts.

Cromwell's spiritual labour, difficulties, bitter strife, sorrows and anguish were the hardships he suffered during the last twenty years of his life. He expressed his deep faith in God and continued his sincere prayers for his family, nation and even for the enemy, in his last days.

In his last utterance, he said, "Truly God is good: indeed He is; He will not —" Here his words discontinued, but he meant to say "— He will not **leave me**." He had genuine belief in God to the very end of his life and went into eternal rest in the Lord.

Blessed are the dead that die in the Lord. God is really good!